

戦気 NO-21

Fighting Spirit

発行者: 三谷大和
 編集者: 岩井 淑
 八千代市八千代台東1-44-13 三谷大和スポーツジム
 電話 & Fax: 047(486)2476 ツヨクナロー
 メール: mitani-y@khaki.plala.or.jp
 URL: http://www.mitani-yamato.com/

マスコットの
 ごんごちゃんです!



10月28日 スーパーフライ級10位 福本雄基 KO勝利!

出入りの激しいボクシングを行う福本の動きに北澤ジムの芦川尚史選手(6勝1KO7敗1分)がついていけない試合展開だった。

1ラウンドから左ジャブが効果的に芦川選手の顔面を捉える。2ラウンドは左右のボディ、左アッパーがいい。打っては離れ、離れては打つ、を繰り返す福本のフットワークは華麗だ。リングを広く使って芦川相手を翻弄する。

回を重ねるに伴い左ジャブが的確に芦川選手の顔面を捕らえヒット数も増えていく。いつもながらスピーディな試合運びだ。接近戦では頭を着けて左右ボディ攻撃を続ける。

6ラウンド開始早々の32秒、芦川選手側セコンドから赤いタオルがリングに投げ込まれ、あっけない形で試合終了となった。セコンドとして、このまま試合を継続しても芦川選手の反撃は望めず選手のダメージを考慮しての判断だったと思われる。

福本は、これで日本ランカー入りしてから2連勝で戦績は12戦10勝3KO2敗となった。

A級第3戦・スーパーフェザー級(10/28) 斎藤 司 10連勝



デビュー以後9連勝と快進撃を続ける司の対戦相手は協栄ジムの杉浦充訓選手(5勝4KO7敗2分)。司はピンクのシューズで元気に登場しラウンドが進むに伴い的確に相手にパンチをヒットさせていく。時折ラッシュ攻撃を見せるが仕留めるまでにはいかない。6ラウンドの終了間際に杉浦選手のフック

を貰い一瞬腰が落ち込んだが踏ん張った。終始圧倒的に有利な試合展開であった。8ラウンド終了で3:0(80-72-79-74-79-74)の判定勝ちを収め、司は無傷の10戦全勝6KOとなった。

今日は良かった。4人出場し4勝3KOなんて初めてです。みんな基礎が出来ています。

三谷会長のコメント

加藤は今日の4試合の中で一番よかった。全日本新人王になれなかった過去を完全に取り戻した。

大は最初硬かったけれど自分のボクシングをしたら相手のパンチは当たらない。ボクシングのレベルが違う。

司は一発もらったけど基礎が出来ている。司もこれで負けなしの10連勝となった。これからも頑張ってください。

福本も基礎がしっかりしているから相手が着いてこれない。



ごんごちゃんは見たい!!

ボクサーにとって重要なのは相手の動きを読み切り、中に入って相手を打ち負かす勇気であり、打たれても打ち返す熱いハートが必要なのだ。

対戦相手をイメージしその相手が練習した質・量の上をいってこそ体力がつくと同時に自信もおのずからついてくるものだ。そして会長やトレーナーから教えられたことが出来るだけでなく、自分で考えて行動できるかが重要なのだ。常に頭を使うことが大切だ。



4ラウンド、福本の右フック

A級第1戦・ライト級(10/28) 加藤健太 2RTKO勝利



リングサイドに響いてくる加藤のパンチ音は本当に凄い。ズドンと腹に響く音だ。対戦選手がまともに打たれた場合の衝撃は強烈だろう。今回の対戦相手はヨネクラジムの佐々木悟選手(7勝4KO4敗2分)。

1ラウンドから加藤の凄いパンチ音が後楽園ホールに響く。ボディフックが佐々木選手に突き刺さり続くストレートでグラつかせる。2ラウンドに入り加藤の勢いは増し左右のフックで1度目のダウンを奪う。

佐々木選手は立ち上がったが加藤は追撃の手を休めずラッシュ攻撃中にレフェリーが分け入って2分30秒でTOK宣言となった。

B級第1戦・スーパーフェザー級(10/28) 岩井 大 5RTKO勝利



大は1ラウンドは硬さが目立ち手数が少ない。2ラウンドに入り徐々に硬さがほぐれパンチも正確に相手を捕らえる。3ラウンドになると動きはより滑らかになり安心して見ていられる。4ラウンドは足を使い出しフットワークも軽快にパンチをヒットさせ安住選手の右脇の腫れでドクターチェック。終了間際に大がバッティングで左脇を切りドクターチェック。5ラウンドは余裕をもったジャブからボディ攻撃、右アッパーで安住選手の顎を跳ね上げ1分8秒でTOKO宣言。

スケジュール

11月1日 第9回三谷大和スポーツジムスパーリング大会
 11月9日 小橋康晃、小林慶行、篠塚和也、前川秀樹

編集後記

「矜持」という難しい言葉があります。意味は自信と誇り。自信や誇りを持って堂々と振る舞うこと。プライドです。ボクシングという精神性の高い崇高なスポーツの名を汚すことなく選手自身がその一翼を担っているという自覚と、人間として真摯に生きていくことが大切です。